スティラマティ『五蘊論註』にみられる信（śraddhā）

箕　浦　暁　雄

はじめに

本稿は、スティラマティ（Sthiramati）による『五蘊論註』（*Pañcaskandhaka-vibhāṣā*）のなかで言及される信（śraddhā）に関する箇所の訳註研究である。アビダルマにおける信については、水野弘元 1964 などの研究があり、『五蘊論註』における信についてふれる論考に、袴谷憲昭 1992、楠本信道 2005 などがある。また、『五蘊論註』チベット語訳からの英訳に Engle 2009 がある。初期経典のなかで語られてきた信の問題が、アビダルマのなかでどのように受けとめられているのか。今日わたしたちが検討すべき論点は多岐にわたる。歩みを支えるこころとしての信についてアビダルマはどのように説明しているのか。自己の欲望のままに何かを求めることと信との区別についてアビダルマはどのような思索を前提として各々の法を規定しているのか。先行研究が教えてくれる知見を参考にして、そこからさらに切り込んで、とくにこうした問題を探りたいと考えている。まずは訳註研究を提示することで信という大きな問題について論ずるためのひとつの準備としたい。

略号

AKBh　*Abhidharmakośabhāṣya*

Pradhan, P., ed., *Abhidharmakośabhāṣya*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.

AS　*Abhidharmasamuccaya*

Pradhan, P., ed., Abhidharma Samuccaya of Asanga, *Visva-Bharati*

Studies 12, Calcutta: Visva-Bharati Santiniketan, 1950.

ASBh *Abhidharmasamuccayabhāṣya*

Tatia, N., ed., *Abhidharmasamuccayabhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. XVII, Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1976.

Derge デルゲ版チベット大蔵経

PP *Prasannapadā*

La Vallée Poussin, Louis de, ed., *Mūlamadhyamakakārikās*（*Mādhyamikasūtras*）*de Nāgārjuna avec la Prasannapadā commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, Biblio Verlag, 1970.

MAVṬ *Madhyāntavibhāgaṭīkā*

Pandeya, Ramachandra, ed., *Madhyāntavibhāgaśāstra: Containing the Kārikā-s of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Ṭīkā by Sthiramati*, Delhi: Motilal Banarasidass, 1971.

Yamaguchi, Susumu, ed., *Madhyāntavibhāgaṭīkā: exposition systématique du Yogācāravijñaptivāda*, Nagoya: Librairie Hajinkaku, 1934.

ŚP *Śatapañcāśatka*

Bailey, Shackleton D. R. ed., *The Śatapañcāśatka of Mātṛceṭa: Sanskrit Text, Tibetan Translation and Commentary, and Chinese Translation*, Cambridge: The University Press, 1951.

MMK *Mūlamadhyamakakārikā*

叶少勇『中论颂：梵藏汉合校・导读・译注』中西書局、2011 年

De Jong, J. W. ed., *Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ*, Madras: The Adyar Library and Research Centre, 1977.

Peking 北京版チベット大蔵経

PS *Pañcaskandhaka*

Li, Xuezhu and Steinkellner, Ernst, ed., *Vasubandhu's Pañcaskandhaka, Critically Edited by Li Xuezhu and Steinkellner with a Contribution by*

Toru Tomabechi, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region No. 4, Beijing: China Tibetology Publishing House, Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.

PSVibh *Pañcaskandhakavibhāṣā*

Kramer, Jowita, ed., *Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā PartI: Critical Edition*, Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region No. 16, Beijing: China Tibetology Publishing House, Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013.

SN Saṃyutta-nikāya, The Pali Text Society.

T 大正新修大蔵経

TrBh *Triṃśikāvijñaptibhāṣya*

Buescher, Hartmut, ed., *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenchaften, 2007.

Lévi, Sylvain ed., *Vijñaptimātratāsiddhi: deux traités de Vasubandhu: Viṁśatikā*（*La vingtaine*）*accompagnée d'une explication en prose, et Triṁśikā*（*La trentaine*）*avec le commentaire de Sthiramati*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1925.

文献

阿毘達磨集論研究会 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(2)」『インド学チベット学研究』2017 年

楠本信道 「インド仏教における信仰と願い― śraddhā, preman, chanda を中心として―」『日本仏教学会年報』第 70 号、2005 年

櫻部建・小谷信千代 『倶舎論の原典解明 賢聖品』法蔵館、1999 年

袴谷憲昭 「如来蔵説と唯識説における信の構造」『信』仏教思想 11、平楽寺書店、1992 年（『唯識文献研究』大蔵出

版、2008 年 再録）

舟橋一哉　『倶舎論の原典解明 業品』法蔵館、1987 年

松下俊英　『瑜伽行唯識学派における菩薩道―『中辺分別論』第 2 章「障品」の解読研究を通して―』博士論文（大谷大学）2012 年

水野弘元　『パーリ佛教を中心とした佛教の心識論』山喜房仏書林、1964 年

箕浦暁雄　「スティラマティ『五蘊論釈』和訳―行蘊（1）」『仏教とジャイナ教―長崎法潤博士古稀記念論集』2005 年

山口益　『安慧阿遮梨耶造 中辺分別論釈疏』鈴木学術財団、1966 年

山口益・野沢静證　『世親唯識の原典解明』法蔵館、1953 年

Engle, Artemus B.　*The Inner Science of Buddhist Practice: Vasubhandu's Summary of the Five Heaps with Commentary by Sthiramati*, New York: Snow Lion Publications, 2009.

Kudo, Noriyuki　Or. 15009/352, Seishi Karashima, Jundo Nagashima and Klaus Wille, *Buddhist Manuscripts from Central Asia, The British Library Sanskrit Fragments Volume III. 1*, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, 2015.

Waldschmidt, Ernst　Kleine Brāhmī-Schriftrolle, *Nachrichten von der Akademie der Wissenschaften in Göttingen Nr. 1*, Philologisch-historisch Klasse, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1959.

ヴァスバンドゥ『五蘊論』における信の規定

信は、『五蘊論』行蘊のなかで言及される。周知の通り、善の心所に包摂される法である。まず、『五蘊論』における信の規定を確認しておく。

PS Li and Steinkellner ed., 6.5-6: śraddhā katamā / karmaphalasatya-ratneṣv abhisampratyayaś cetasaḥ prasādaḥ /

信とは何か。業と果と〔四〕諦と〔三〕宝に対する確信であり、心の澄浄である。

Peking si 14a5-6; Derge shi 13a1-2: དད་པ་གང་ཞེ་ན། ལས་དང་འབྲས་བུ་དང་། བདེ་བ་དང་། དགེ་མཚོག་ལ་མངོན་པར་ཡིད་ཆེས་པ་དང་། འདོད་པ་དང་། སེམས་དང་བདེ། ।

T31 848c21-22: 云何爲信。謂於業果諸諦寶中極正符順心淨爲性。

スティラマティ『五蘊論註』における信（試訳）

『五蘊論註』には、サンスクリット原典とチベット語訳が現存する。サンスクリット原典はヨヴィタ・クラマーによる校訂本（PSVibh: 信の規定 40 頁 1 行目～43 頁 15 行目）を底本とする。チベット語訳は、北京版大蔵経、デルゲ版大蔵経（信の規定 Peking hi 21a7-25b6; Derge shi 211b3-213b1）を参照した。大蔵経所収のテクスト以外にも敦煌出土のチベット語写本がある。その詳細についての言及は避ける[1]。さらに敦煌所伝の漢文『大乗廣五蘊論』（地婆訶羅訳）がある。サンスクリット原典やチベット語訳に比べて極めて短いテクストであり、原典に忠実な訳文ではない。信の規定箇所は以下の通りである。

『大乗廣五蘊論』T31 852a10-16：**云何信。謂於業果諸諦寶等深正符順心淨爲性。**於業者謂福非福不動業。於果者謂須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢果。於諦者謂苦集滅道諦。於寶者謂佛法僧寶。於如是業果等極相符順。亦名清淨。及希求義。與欲所依爲業。

太字は『五蘊論』本文であることを示す。この本文の表記は、先に示した玄奘訳『五蘊論』本文と若干異なる。釈文についてもサンスクリット原

典やチベット語訳にはない表現が見られる。

『五蘊論註』サンスクリット原典と和訳

śraddhā katamā / karmaphalasatyaratneṣv abhisampratyayo ’bhilāṣaś cetasaḥ prasāda iti / karma trividham, puṇyam apuṇyam āniñjyaṃ ca / tatrāpuṇyaṃ kāmāptam eva, akuśalamūlasamprayogāt / puṇyam api vipākaniyamāt kāmāptam eva / karmavipākakaṃ praty aniñjanād āniñjyam / apuṇyasya kāmadhātāv aniṣṭo vipākaḥ, puṇyasyeṣṭaḥ / aniñjasya rūpārūpadhātvor iṣṭa eva vipākaḥ /

信とは何か。業と果と〔四〕諦と〔三〕宝に対する確信であり、希求[2]であり、心の澄浄である。業は三種類である。福と非福と不動とである。そのなかで、非福とはまさに欲求の獲得である。不善根と相応するからである。福もまた、異熟であるとの決定ゆえに、まさに欲求の獲得である。業の異熟に対して不動であるから「不動」なのである。非福は、欲界における好ましくない異熟であり、福は〔欲界における〕好ましい〔異熟〕である。不動は、色〔界〕と無色界とにおけるまさに好ましい異熟である。

［業と果とに対する確信］

tatra karmaphalayor astīty abhisampratyayākārā śraddhā / asti kuśalam akuśalaṃ ca karma, tac ca yathākramam iṣṭāniṣṭaphalam, kuśalākuśalakarmahetukam, neśvarādinirmitam iti ya evaṃ karmaphalasvarūpe ’viparīte ca karmaphala-vipākayor hetuphalasambandhe ’bhisampratyayaḥ, iyaṃ karmaphalayor astitvasampratyayākārā śraddhā /

そのなかで、業と果とが存在するという確信を行相とする信とは、善〔業〕と不善業とが存在し[3]、またそれは順次に、好ましい〔果〕と好ましくない果とを持つものであり、善〔業〕と不善業との因を持つものであり、「イーシュヴァラなどによって化作されたものではない」と〔言い〕、またこのように、業と果との性質は顚倒することなく、業と果との異熟が因果

関係のなかにあるという確信なのであり、これが業と果とが存在することに対する確信を行相とする信である。

［諦に対する確信］

duḥkhasamudayanirodhamārgāḥ satyāni / ①āryāṇāṃ pratikūlatvād anityatvāditvenāvitathātvāc ca phalabhūtāḥ pañcapādānaskandhā duḥkhasatyam / ②duḥkhahetutvāt pratyayādyākāraiś cāviparītatvād dhetubhūtās ta eva pañcopādānaskandhāḥ samudayasatyam / ③sahetukaduḥkhopaśamātmakatvāc chantādyākāreṇāviparītatvāc ca duḥkhanirodho nirodhasatyam / ④duḥkhanirodhaprāpakatvān nairyā［Kramer ed., p. 41］ṇikatvādināvitathātvāc cāryāṣṭāṅgamārgo mārgasatyam / tatra duḥkhasamudayasatyayor asti duḥkham asti samudaya ity abhisampratyayākāraiva śraddhā / nirodhamārgasatyayor abhilāṣākārā śraddhā, śakyo mayā prāptuṃ nirodho mārgaś cotpādayitum iti //

諦とは苦集滅道である。①聖者たちに敵対するものであるから、また無常であることなどの点で虚偽ではないから、果となっている五取蘊が苦諦である[4]。②苦の因であるから、また縁などの行相という点で顚倒していないから、因となっているまさにそれら五取蘊が集諦である。③因を持つ苦の消滅を本性とするから、また寂静などの行相という点で顚倒していないから、苦の消滅が滅諦である。④苦の消滅へと導くから、また出離に関することなどという点で虚偽ではないから、聖なる八支からなる道が道諦である。そのなかで、苦〔諦〕と集諦に対して、苦が存在し集が存在するという確信の行相こそが信である。滅〔諦〕と道諦に対して、「私には、滅〔諦〕が證得されうる、また道〔諦〕が生起しうる」という希求を行相とするものが信である[5]。

［宝に対する確信］

ratnāni trīṇi buddhadharmasaṅghāḥ / durlabhatvān mahārghatvāt prītikaratvād upakārakaratvād amānuṣādyupaghātapratipakṣatvāc ca ratnānīva ratnāni /

宝とは仏と法と僧との三つである。獲得しがたいから、貴重であるから、歓喜を起こすから、利益するから、人でない者（神々）などを害することの対治であるから、諸々の宝のごとくに〔三〕宝なのである[6]。

tatra durlabhatvaṃ —— bhavabhogeṣv asaktaiḥ kāyajīvitanirapekṣair bodhisattvair nairantaryeṇa bodhisambhāreṣu pravartamānais tribhiḥ kalpāsaṅkhyeyair buddhatvaṃ prāpyata iti durlabham / ata evodumbarapuṣpaprādurbhāvavad durlabho buddhotpāda ucyate / buddhotpādasya ca durlabhatvād dharmasaṅgharatnayor api durlabhatvaṃ buddhotpādapratibaddhatvāt /

そのなかで、獲得しがたいとは、世間の歓楽に執着せず、身命を惜しまず、菩薩たちは絶え間なく菩提資糧[7]に対して行ずることによって三阿僧祇劫をへて仏であることを得ているのだから、獲得しがたいのである。だからこそ、ウドゥンバラの花の現れる〔ことが得がたい〕ように仏の出世は獲得しがたいと言われる。また、仏の出世は獲得しがたいから、法と僧との宝もまた仏の出世に繋ぎとめられているのだから獲得しがたいのである。

mahārghatvaṃ punaḥ prāptaprakāmaprakarṣāvasthaiḥ puṇyajñānobhayasambhāraiḥ prāpyatvāt / tatra puṇyasambhāro dānaśīlakṣāntipāramitās tisraḥ / jñānasambhāraḥ prajñādhyānapāramite / puṇyajñānasambhārāṅgabhāvagamanād vīryapāramitobhayasambhāraḥ / dharmaratnam api sarvasaṃskṛtaparityāgena prāpyatvān mahārgham / saṅgharatnam api sāṃsārikaphalanirvartakaviśiṣṭābhyāṃ puṇyajñānābhyāṃ prāpyata iti mahārgham /

さらに、貴重であるのは、得た喜びが勝っている況位にある者によって、〔すなわち〕福徳と智との二つの資糧を具える者によって、得られることだからである。そのなかで、福徳の資糧は布施と戒と忍との最高性という三つである。智の資糧は、慧と定との最高性である。福徳と智との資糧の支分の状態に達しているから、精進の最高性は〔福徳と智との〕両者の資糧なのである。法という宝もまた一切の有為〔法〕を捨て去ることによっ

て得られることであるから貴重なのである。僧という宝もまた流転に属する果をもたらすもののなかで殊勝なものである福徳と智とによって得られるから、貴重なのである。

ratnatrayaṃ hi darśanaśravaṇānusmaraṇaiḥ prītihetutvāt prītikaram / tathābhigamanādhyupāsanānveṣaṇaparijñānaiḥ sattvānām upakārakaram / yathoktam [Kramer ed., p. 42]

śrīkaraṃ te ’bhigamanam, śaṅkaram adhyupāsanam /
anveṣaṇaṃ matikaram, parijñānaṃ viśodhanam //

iti /

実に三宝は、〔それらを〕見・聞・随念することで歓喜の因となるから、歓喜を起こすものである。〔三宝に〕近づき、側らに座し、求め、遍く知ることによって、衆生に利益するものである。次のように説かれている。

あなたに近づくなら幸運がもたらされ　側らに座すなら繁栄がもたらされる
求めるなら智慧がもたらされ　遍く知るなら浄化される[8]

と。

amānuṣādyupaghātapraśamanaṃ punar tathoktaṃ sūtre —— saced bho bhikṣavo ’raṇyagatānāṃ veti vistareṇa yāvat yat tad bhaviṣyati bhayaṃ vā cchambhitatvaṃ vā romaharṣo vā tat pratigamiṣyatīti /

さらに、人でない者などを害することを鎮めることは、経のなかで次のように説かれている。「比丘たちよ、もし森に行き、あるいは、乃至、恐怖や硬直や身の毛がよだつことが起ころうとも、それはもとに戻るであろう[9]」と。

evaṃ dharmaratnānusmaraṇe saṅgharatnānusmaraṇe ca vaktavyam / tatra sarvasmiñ jñeye ’saktāpratihatajñānaśaktilābhād āśrayaparāvṛttir buddhaḥ / sā

punaḥ sarvasāsravadharmabījāpagatā sarvānāsravadharmabījapracitā, anantaprabhāvaparigrahā, cintāmaṇiratnavad anābhogenāśeṣasattvārthakaraṇa-samartheti //

同様に、法という宝を随念することと僧という宝を随念することが語られるべきである。そのなかで、一切の知られるべきことについて、固執せず妨げられない智の力を得ることから、所依を転ずる（転依）者が仏である。さらに、そ〔の転依する者〕は、一切の有漏法の種子が捨てられ一切の無漏法の種子が集められ、間断なく威力によって把握され、如意宝珠という宝のごとくに無功用によって余すことなく衆生を利益することができる者である、と。

dharmas trividhaḥ / deśanādharmaḥ sūtrageyādikaḥ / pratipattidharma āryāṣṭāṅgo mārgaḥ sopacāraḥ / paramārthadharmo nirvāṇam / sa ca dviprakāraḥ —— sopadhiśeṣo nirupadhiśeṣaś ca / tatra kleśavisaṃyogākhyaḥ sopadhiśeṣaḥ / vartamānajanmanirodhe ’nāgatajanmānutpādo nirūpadhiśeṣaḥ //

法は三種類である。経や重頌など[10]の説かれた法、聖なる八支からなる道に随うものである修行という法、涅槃という勝義なる法である。また、それ（涅槃）は二類である。有余依涅槃と無余依涅槃とである。そのなかで、煩悩の離繫という名称を持つものが有余依〔涅槃〕であり、現在における生が尽きたとき未来に生が起こらないことが無余依〔涅槃〕である。

aṣṭau puruṣapudgalāḥ saṅghaḥ —— catvāraḥ pratipannāś catvāraś ca phalasthāḥ / parasparataḥ śāsastṛtaś cābhedyārthena saṅgaḥ /

僧は八つの賢聖である。〔果に〕向かう者の四つと、果に住する者の四つとである[11]。互いにそして師〔である仏〕と別たれるべきでないという理由で、僧なのである。

①仏に対する信 ②法に対する信 ③僧に対する信

①sarvaguṇadoṣaprakarṣā［Kramer ed., p. 43］pakarṣaniṣṭhāgatatvād buddhe bhagavati romāñcāśrupātādisūcitā prasādalakṣaṇā śraddhā / ②sarvasahetukaduḥkhopaśamātmakatvāt prāpakatvāt taddyotakatvāc ca dharme prasādalakṣanaiva śraddhā / ③saṃsārapaṅkottīrnatvāt saṃsārapaṅkottaraṇamārgāvasthitatvāc ca saṅghe ’pi prasādātmikaiva //

①一切の功徳は勝れていて〔一切の〕過失は取り除かれているという、究極に到達しているから、仏・世尊に対して身の毛がよだち涙を流すことが示される〔ような〕澄浄という相が信である[12]。②あらゆる因を有する苦の寂滅を本性とするものであることから、到達させるものであることから、そ〔の到達〕を明示するから、法に対する実に澄浄な相が信である。③流転の泥から救い出すから、また流転の泥から救う道という況位にあるから、僧に対する〔信〕もまた実に澄浄なる本性を持つものである。

［希求・澄浄］

śraddhā hi trividhā pravartate / sati vastuni guṇavaty aguṇavati vā sampratyayākārā, sati guṇavati ca prasādākārā, sati guṇavati ca prāptum utpādayituṃ śakye ’bhilāṣākārā / nanv evam abhilāṣākāratvāt tṛṣṇācchandayor anyatarā bhavati / naitad evam / kuśalaviṣayatvān na tṛṣṇā, śraddhāpūrvakatvāc chandasya na chandaḥ / *cetasaḥ prasāda iti / śraddhā hi cittakāluṣyavairodhikīty atas tatsamprayogo kleśopakleśamalakāluṣyavigamāc cittaṃ śraddhām āgamya prasīdatīti cetasaḥ prasāda ucyate* / udakaprasādakamaṇisthānīyaṃ dharmāntaraṃ caitasikaṃ śraddhā, na rūpaprasādātmiketi pradarśanārtham āha —— cetasaḥ prasāda iti / cetasaḥ prasādaḥ, na rūpasyeti / *sā punaś chandasanniśrayadānakarmikā //*（イタリック体は『唯識三十論』と同一文）

というのは、信は三種類として生起するからである[13]。功徳を持つあるい

は功徳を持たない事態が存在することに対しては確信[14]の行相があり、また功徳を持つことが存在することに対しては澄浄の行相があり、また〔滅諦が〕證得され〔うる〕し〔道諦が〕生起しうる功徳を持つことが存在することに対しては希求の行相がある。同様に、希求の行相ゆえに渇愛と欲と〔の二つと〕はまったく別ということになるのではないか。このことはそうではない。善なる境であるから渇愛ではなく、欲が信を前のものとするから欲ではない。心の澄浄とは、信は心の汚濁と相反するのだから、それ（心）と相応する場合に煩悩と随煩悩という垢の汚濁を離れるから、心が信に近づいて澄浄になるから、心の澄浄と言われる。水を澄浄にする宝石を表す〔ような、心とは〕別の法が、信という心所〔法〕であって、色の澄浄を本性とするものではないことを示すために「心の澄浄」と言う。澄浄とは心についてであって色についてではない[15]。さらに、それ（信）は欲に所依を与える作用を持つものである[16]。

2018 年 10 月 26 日（金）に開催された大谷学会研究発表会において「勇気から起こる風―アビダルマにおける信仰についての整理と解釈―」と題して発表する機会を得た。本稿はその発表のために準備したものの一部である。原稿作成に際して大谷大学非常勤講師の松下俊英氏、大谷大学助教の梶哲也氏、大谷大学大学院博士後期課程の向田泰真氏から貴重な意見を頂戴した。心より謝意を表する。

註

1　箕浦暁雄 2005 参照のこと。

2　PSBh Kramer ed., p. 40 註 1 によれば写本は abhisaṃpratyaya{{ .. }}ś cetasaḥ と一文字分消されていて abhilāṣa の語はない。グナプラバ註（Peking hi 79a5; Derge si 12a1）とプリティヴィーバンドゥ註（Peking hi 124a6; Derge si 52a1）が引く PS 本論には、abhilāṣa の訳語である འདོད་པ の語は見られない。よって、スティラマティ註チベット語訳だけに འདོད་ の語があることになる。他方、AS, ASBh, TrBh に abhilāṣa の語が見られる。AS, ASBh における信の規定については、阿毘達磨集論研究会 2017 pp. 72–73 参照のこと。TrBh については後に触れる。

3　異熟無記を確信するということはない。ここは業の分類一般についての言及ではなく、あくまでも信の規定であるから、あえて善業と不善業のみがあることを確認していると理解すればよい。

4　AKBh「賢聖品」の一節（Pradhan ed., 328.12–13: tatra phalabhūtā upādāna-skandhāduḥkhasatyam /）に対応する。この PSVibh 四諦についての註釈文は、AKBh「賢聖品」の記述をも参考に、次の通りの理解を前提としたものと考えればよい。すなわち、苦諦は苦の果としての五取蘊であり、集諦は苦の因としての五取蘊である。両者の名称は別であるが、実体は別ではない。滅諦と道諦は実体も別である。

5　ASBh Tatia ed., 5.11–12: guṇatve prasādākārā śakyatve ’bhilāṣākārā śakyaṃ mayā prāptuṃniṣpādayituṃ veti /

TrBh Buescher ed., 76.9: sati guṇavati ca prāptum utpādayituṃ vā śakye ’bhilāṣākārā /

PSVibh 信の規定における最後の註釈文は TrBh とほぼ一致する。当該箇所をも参照のこと。山口益・野沢静證 1953 pp. 264–265 は TrBh の文章を「〔滅諦を〕證得しうべき、或は〔道諦を〕生ぜしめうる」と PSVibh チベット語訳（བདག་གིས་འགོག་པ་ཐོབ་པར་བྱ་བ་དང། འམ་བསྐྱེད་པར་རུས་པ་ལས་ཀྱང།）に従って読む。この箇所では、次のことが確認されたことになる。① 信とは、苦諦と集諦があるという確信。② 信とは、滅諦と道諦に対する希求。

6　チャンドラキールティ『プラサンナパダー』第 24 章 第 5 偈の註釈文にはいくらかよく似た表現が見られる。PP La Vallée Poussin ed., p. 489 参照。また「人でない者（神々）などを害すること」という表現については『旗先経』（*Dhajaggam*）を念頭においた表現と言える。

7　菩提資糧について『大乗荘厳経論』第 18 章 第 38–41 偈 を参照のこと。Engle 2009 p. 476 註 223 が記す通り、第 40 偈では語源解釈がなされている。

8　*Śatapañcāśatka* 第 94 偈・第 95 偈と一致する。ŚP Bailey ed., pp. 104–106 参照。＊下線筆者。

kīrtanaṃ kilbiṣaharaṃ smaraṇaṃ te pramodanam /
anveṣaṇaṃ matikaraṃ parijñānaṃ viśodhanam // 94 //
།བསྔགས་པས་སྡིག་པ་འཇོག་པར་མཛད།།ཁྱོད་དྲན་པས་ནི་རངས་པར་འགྱུར།
།བཙལ་བས་བློ་གཏོང་བྱེད་དེ།།ཡོངས་ཤེས་པས་རྣམ་པར་འདག།
讃詠除衆毒　憶念招欣慶
尋求發慧明　解悟心圓潔
śrīkaraṃ te ’bhigamanaṃ sevanaṃ dhīkaraṃ param /
bhajanaṃ nirbhayakaraṃ śaṃkaraṃ paryupāsanam // 95 //
遇者令尊貴　恭侍勝心生
承事感福因　親奉除憂苦
།ཁྱོད་ལ་བསྲུབ་པས་ལུ་ཏེ།།བསྟེན་པས་ཐུགས་ཉོན་ཞི་ལམ་ཕྱོགས་ཏུ་འགྱུར།
།བསྟེན་ན་འཇིགས་པ་མེད་པར་མཛད།།བསྟེན་བཀུར་བཞིས་པས་བདེ་བར་འགྱུར།

9　『旗先経』（*Dhajaggam*）の引用である。阿修羅との戦いで恐怖する神々に対してパジャーパティなどの旗先を見上げたら恐怖は除かれようとサッカは呼びかける。それとは対照的にブッダは、貪りなどを離れていない者には恐怖などが除かれるとはかぎらず、仏法僧の三宝を随念することによってこそ、恐怖などが除か

れると説く。スティラマティはこの経をここに引いて、三宝が衆生を利益するものであることを示そうとしている。仏を随念することについて『旗先経』は次のように説く。

SN Dhajaggam pp. 219–220: sace tumhākaṃ bhikkhave araññagatānaṃ vā rukkhamūlagatānaṃ vā suññāgāragatānaṃ vā uppajjeyya bhayaṃ vā chambhitattaṃ vā lomahaṃso vā, mameva tasmiṃ samaye anussareyyātha —— itipi so bhagavā arahaṃ sammāsambuddho vijjācaraṇasampanno sugato lokavidū anuttaro purisadammasārathi satthā devamanussānaṃ buddho bhagavā'ti.

mamañhi vo bhikkhave anussarataṃ yaṃ bhavissati bhayaṃ vā chambhitattaṃ vā lomahaṃso vā so pahīyissati.

比丘たちよ、もしあなた方が森に行き、あるいは樹の根本に行き、あるいは空屋に行ったとき、恐怖や硬直や身の毛がよだつことが起こったならば、そのときには私を随念しなさい。「というのも、かの世尊は阿羅漢であり、正覚者であり、明行足であり、善逝であり、世間解であり、無上士であり、調御丈夫であり、天人師であり、仏であり、世尊である」と。

比丘たちよ、というのは、あなた方が私を随念するなら、恐怖や硬直や身の毛がよだつことが起ころうとも、それは除かれるであろうから。

対応するサンスクリット断片については、Waldschmidt 1959 pp. 8–13 および Kudo 2015 pp. 234–235 参照。

10　経（sūtra）や重頌（geya）などとは、十二部経（十二分教）と称する区分に基づく言及である。AS Pradhan ed., 78.2ff; ASBh Tatia ed., 95.3ff;『阿毘達磨集論』巻第六 T31 686a21ff;『阿毘達磨雑集論』巻第十一 T31 743b7ff 参照。

11　AKBh「賢聖品」を見ておく必要がある。AKBh Pradhan ed., 366.1ff; 櫻部建・小谷信千代 p. 301 参照。類似の表現は『中論』にも見られる。＊下線筆者。

tadabhāvān na vidyante catvāry āryaphalāni ca /

phalābhāve <u>phalasthā</u> no na santi <u>pratipannakāḥ</u> // MMK24.3 //

No. 1564 T30 32b17–18

以是事無故　則無四道果

無有四果故　得向者亦無（第 24 章 第 3 偈）

saṃgho nāsti na cet santi te <u>'ṣṭau puruṣapudgalāḥ</u> /

abhāvāc cāryasatyānāṃ saddharmo 'pi na vidyate // MMK24.4 //

No. 1564 T30 32b19–20

若無八賢聖　則無有僧寶

以無四諦故　亦無有法寶（第 24 章 第 4 偈）

12　MAVṬ に同様の表現が見られる。ここでは、修習の況位（avasthā）について言及するなかで、仏が究極に到達していることを理由にその況位を無上（uttara）と呼ぶことを述べる（MAVṬ Yamaguchi ed., 189.22–24.; Pandeya ed., 142.19–20: sarvaguṇadoṣaprakarṣāpakarṣaniṣṭhānatvād buddhasya tata ūrdhvam anyā viśiṣṭāvasthā na vidyate iti saivānuttarety ucyate /）。

またMAVṬは、疑結（vicikitsā-saṃyojana）が三宝を遍知することに対する障害であるということについて、そ〔の三宝〕の功徳を信じないからであると言う（MAVṬ Yamaguchi ed., 73.20; Pndeya ed., 56.25: tadguṇānabhiśraddhānād iti /）。さらに、説明して「一切の功徳は勝れていて〔一切の〕過失は取り除かれているという、究極の拠り所である〔と遍知する〕ことによって、仏という宝に対する遍知である」（MAVṬ Yamaguchi ed., 73.21–22; Pandeya ed., 56.26: sarvaguṇadoṣaprakṛṣṭāpanītaparyantāśrayatvena buddharatne parijñānaṃ /）と註釈する。以上のテクストは筆者修正。松下俊英 2012 pp. 71–72 参照。

流転の過患と無我と涅槃の功徳について聞くことで、身の毛がよだつことがあり涙を流すことがあり、それは順解脱分の善根があることを示すと、AKBh「業品」は説明する。AKBh Pradhan ed., 274.19–21; 舟橋一哉 1987 p. 528 参照。

13 〔滅諦を〕獲得することができ〔道諦を〕生起させられることができる（prāptum utpādayituṃśakye）の箇所は既出の文章と同様に読む。この文章以降のPSBh Kramer ed., 43.5–15は、TrBh（Buescher ed., 76.6–12; Lévi 26.25–30）とよく一致する。イタリック体は一致することを示す。MAVṬ「対治修習品」における五根の信（MAVṬ Yamaguchi ed., pp. 176–177; Pandeya ed., pp. 132–133）についての言及も参照すべきである。山口益 1966 pp. 282–284 参照のこと。

14 ここは、PSやPSVibh既出のabhisampratyaya（མངོན་པར་ཡིད་ཆེས་པ）ではなく、sampratyaya（ཡིད་ཆེས་པ）であり、TrBhも同じ。

15 色（rūpa）について、澄浄な色（rūpa-prasāda）という場合があるので、澄浄といってもここではそのことを言及しているのではないことに注意を促す意図がある。

16 欲は必ずなんらかの対象をとろうと求めることであり、その対象は善でも不善でもよい。渇愛は不善を求めるという方向性を持つものとして規定される。信は善を求めるという方向性を持つものと規定される。よって、善なる境の場合、渇愛はないし、信を前のものとする場合、善であれ不善であれいかなる対象であれそれをとろうとすることである欲は存在しない。このように理解できる。PSにおける欲（遍行心所）の規定は以下の通り。

PS Li and Steinkellner ed., 5.8: chandaḥ katamaḥ / abhiprete vastunyabhilāṣaḥ /
欲とは何か。望む事態に対する希求である。

Peking si 14a3; Derge shi 12b7: འདུན་པ་གང་ཞེ་ན། བསམ་པའི་དངོས་པོ་ལ་འདོད་པའོ། ।
T31 848c14–15: 云何爲欲。謂於可愛事希望爲性。

MAVṬ「対治修習品」は五根について触れる第6偈のなかの「欲と加行との増上ゆえに」を註釈して次のように言う。「欲の増上ゆえに、とは原因に結果を仮説するから、信こそがここに欲の語によって説かれている（MAVṬ Yamaguchi ed., 176.14–15; Pandeya ed., 132.23–24: chandādhipatyata iti kāraṇe kāryopacārāc chraddhaivātra chandaśabdenoktā /）。また続くMAVṬの言及もPSVibhやTrBhの説明と一致するものである。存在すること・功徳を持つこと・功能があることに対する、〔各々〕順序通り、確信・澄浄・希求とは、心の相である。だから、欲の

言及によってここで希求の相をもつ信こそが述べられているのであって、欲〔が述べられているのでは〕ない、と（Yamaguchi ed., 176.16–19; Pandeya ed., 132.25–26: atha vāstitvaguṇaśaktiṣu yathākramam abhisaṃpratyayaprasādābhilāṣāḥ śraddhāyālakṣaṇam / ata cchandagrahaṇenātrābhilāṣalakṣaṇā śraddhaiva gṛhyate na tu cchanda iti /）。

（大谷大学教授　仏教学）

〈キーワード〉ヴァスバンドゥ、アビダルマ、瑜伽行唯識学派